

バリエーションが豊富な「MERI」の布ぞうりのなかで、無地のものはほぼベトナムの女性たちが手作りのもの



## MONO語り

Vol.119 ベトナム



ベトナムの首都ハノイから車で1時間半ほど走れば、そこは田畑の広がる農村地帯。昔からベトナムの農村部の女性たちは、男性を田んぼに送り出した後は、家で内職仕事をしてきた。そして今、ハノイ近郊の農家の女性たちが日本の布ぞうりを手作りしている。

この布ぞうりは、東京・両国にある「オレンジトキョー」の商品。社長の小高集こたかついさんが、青森のおばあちゃんたちが手作りしていたふっくらとやわらかく、履き心地のいい布ぞうりにほれ込み、おばあちゃんたちの技術にメリヤス編みの紐とかわいいデザインを組み合わせて、「MERI」というブランドとして展開している。ぞうりと鼻緒の色や柄の組み合わせのバリエーションが豊富で、日本のお土産としても海外の観光客から人気を博するようになっている。

しかし、編む技術を習得するのに1年以上かかり、なかなか職人が育たず困っていたところ紹介されたのが、ベトナムの女性たちだった。「もともと手先が器用で、籐のかごなどを内職として作っていましたが、材料となる籐は汚れが多く、作業中のけがも多かったそうです。布ぞうりの材料はメリヤスの紐ですし、けがもないので、安心して

文・久島玲子(編集部) 写真・高岡弘

# 農村の女性たちの器用な手が編む布ぞうり

作ってもらっています」。

とくに日本の職人さんがベトナムを訪れたときは、通訳を介しながらも編み方や質を高める工夫を聞かれるなど、編み手同士の交流が生まれ、ベトナムの女性たちの意欲も高まったそうだ。「本当に彼女たちには助けてもらっています。これからも続けたいと言ってくれているので、息の長いおつきあいをしていきたいです」。



こうして1か所に集まって編むと、おたがいにわからないことを聞き合え、技術の向上につながるし、仕事も楽しくできる

商品の購入は甘橙東京まで▶<http://www.daidai.tokyo/>